

三菱一号館 復元と文化交流拠点の構築

三菱地所 株式会社 殿
株式会社 三菱地所設計 殿
株式会社 竹中工務店 殿

旧三菱一号館は 1894 年（明治 27 年）丸の内に竣工したわが国初の近代オフィスビルであった。設計者はジョサイア・コンドルと現場主任でもあった曾禰達蔵らが担当した。三菱の直営工事で地下 1 階、地上 3 階建て（軒高 50 尺）、煉瓦造・木造クイーンポストトラス組、天然スレート・銅板葺の優美な建築は三菱本社と賃貸オフィスという用途で使用されていた。

高度成長期でメタボリズム全盛の 1968 年、重要文化財指定の声もある中、この旧三菱一号館は効率的な不動産開発のために撤去解体され、大型オフィスビルへと建て替えられてしまった。

本業績の対象となる“復元”三菱一号館は 2009 年に更に巨大な超高層オフィス開発の容積割増の役割を担いながらも丸の内再構築の都市文化の形成を先導するという使命を持って、復元建設された。

三菱一号館復元計画はこうした背景の中、以下の 5 段階の時系列によるそれぞれの業績の総和として評価される。

- 1) 旧三菱一号館を取り壊すにあたり、設計図や改修図（当初図）及び内外の細部に至る写真等を保管し、将来の復元可能性も考えて詳細な実測図を作成した上で、石材、窓枠、金物など多くの部材を採取保管しておくという決断をし、それを実行していた。
- 2) 2004 年（平成 16 年）、三菱地所は丸の内再開発の中で二つの復元検討委員会（日本都市計画学会、本会関東支部）の提言を受け、表層だけでなく歴史的根拠に基づき極めて忠実に構造や造作も復元しようと起案し、都市開発の事業性や社会性に照らした計画に仕立てて行政の了解を得て、この復元を決定した。
- 3) 三菱地所設計は史料（当初図、写真、実測図、当初部材等）を丹念に分析し、免震構造以外は新たな補強も加えず、可能な限り当初部材を使用して基礎を除く煉瓦造や木造小屋組で建築を復元設計し、耐震・防火性能はじめ基準法の適合を図りながら、現代に求められる美術館としての計画を三菱一号館の中に実現させるという業績を果たした。
- 4) 復元工事を担当した竹中工務店は 230 万個の煉瓦を当時の製造法を採用した中国から調達するなど、屋根材、ガラス、仕上げ材、ディテールに至るまで、現代の職人の手によって出来る限り当初に近い材料そのものを復元し、手作りの風合いを生かす創意工夫を惜しまず施工した。
- 5) 本来はオフィスであった三菱一号館は不特定多数の人々が利用できる美術館として活用されている。ここにも設計、施工上の様々な工夫が施されており、かつて建物

裏であった部分が超高層オフィスタワーとの中庭として緑化され、一号館を眺める対象としての価値を超えて、周辺の商業店舗とも色やスカイラインを統一し、見事に一体感のある街として丸の内の都市景観の中、快適な都心交流拠点として機能し運営されている。

こうした五つの段階で復元・再生のために多くのエネルギーと努力が払われた。ここに関わったすべての三菱地所の部署と意思決定者、そしてこれを実行した三菱地所設計、竹中工務店の業績は高く評価されるべきである。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。